

編集後記

小澤 俊文 総合犬山中央病院消化器内科

近年の本誌8月号は、掘り下げるべきテーマを絞ることをせず、暑い夏の季節に気楽に読める内容を目指して企画される経緯がある。今回は“「胃と腸」式 読影問題集”と銘打って、読者に問題を解き進んでいただく内容であり、本誌初の試みである。読者には、早期胃癌研究会で読影者として指名された気持ちになって、各問題に取り組んでいただけるような構成とした。また、“X線ではどこまでわかるか”、“通常内視鏡ではどこまでわかるか”、“拡大観察による診断は何か”、“鑑別すべき疾患は何か”、“総合的にどのように診断するか”など、本誌ならではの思考過程を重視した「考える画像診断」能力を鍛える問題集を目指して企画したつもりだが、本特集号の完成度を読者はどのように評価いただけたのだろうか。各執筆者には、解説に相当する「診断へのアプローチ」では挙げるべき鑑別診断と、それぞれを否定しうる“根拠”に特に力点を置いて執筆していただいた。結果として答え(=最終診断)が違っていても、研究会や誌面上での読影/診断に根拠ある誤診は大いにすべきである、と言っても乱暴ではないと思う。必ずや読者の血となり肉となるはずだ。

「胃と腸」編集委員を中心に、エキスパートの先生方に問題作成を依頼した。疾患名は特に指定せず各執筆者に委任したものの、最も重要視した「診断過程」については極力統一を図った。小生自身もすべての問題に目を通して見たが、美しい画像の数々

はもちろん、執筆者らの診断課程/進め方もさまざまであり勉強になるだろうと自負している。なお、多彩と言っても、基本となる診断に迫る姿勢(全体から微に入る)はほぼ共通しているものであろう。

序説では斉藤が、読影に際する基本姿勢について述べている。拡大内視鏡一辺倒の現況に警鐘を鳴らしており、通常観察やマクロ像を意識しない読影姿勢を強く批判している。全くの至言であり、これは老練な先達の戯言などでは決してない。したがって、特に若手の医師は本序説を精読し、編集の企図を汲んでいただきたい。

最後に、AI診断の進歩も目覚ましいものがあるが、万能とは言えない。AI診断の時代においても“考える内視鏡診断”の診断過程および重要性には普遍性があると思考している。今回の企画“「胃と腸」式読影”方法/姿勢のように、まずは森全体を、すなわち基本画像を“俯瞰的に”診て、引き続き拡大内視鏡や生検診断を補助的に用いるという根本姿勢は今後とも変わらないであろう。気楽に読み始めた読者が、いつのまにか熱中して読み進めて、知らず知らずのうちに読影方法の基本原則が身につくような内容になれば幸甚である。そして近い将来、コロナ禍を脱し読者らと実際の研究会/学会の場で侃侃諤諤と討論できる日を鶴首しているのは小生だけではあるまい。諸兄の診断能力向上に本特集号が少しでも役立つことを期待して筆を置く。